

反障害通信

16. 4. 20

57号

「障害者」が政治行動の先頭に

—共に行動する情報・コミュニケーション・アクセス保障を考えるために—

「障害者」が政治行動の先頭に

反原発や戦争法案反対ということで、官邸前や国会前、そして街頭で大きな運動が起きていました。ですが、「障害者」がそれに参加していくことが少ないようなのです。それはSNSなどにも同様で、もちろん、政治的なことに精力的に発言をつづけているひとはいるのですが、むしろ、与党にすり寄って、そこで福祉のパイの分け前に、預かろうというひとも出ているし、ネトウヨ的な発言も見受けられます。「障害者」は障害問題では動くのですが、政治的な活動に参加していくことが少なくなっていると感じているのはわたしだけでしょうか？ そもそも全体的に、政治意識が後退し、運動が衰退し、労働運動が政治的な課題で動かなくなっているのですが、「障害者運動」においては、情報障害・コミュニケーション障害・アクセス障害の問題もあってか、特に動かない状況になっているようです。

災害や原発事故の際に、「障害者」や高齢者・病気のひとが特に被害を被ります。「避難弱者」ということで、表されています。

そして、過去の歴史をとらえ返せば、「戦争とファシズム」の道に踏み行っていくとき、福祉の切り捨てが起き、そして優生思想に基づく断種や「障害者」抹殺が起きてくる、生きること自体が否定的にとらえられる「障害者」へ抑圧の時代になります。まさに、一番の被害者は「障害者」や「障害者的存在」のひとなのです。ですから、「戦争とファシズム」反対の行動の先頭に立つのは、「障害者」だと思のです。

「障害者運動」の標語には、「障害者が生きやすい社会は、みんなが生きやすい社会である」があります。まさに「障害者」の利害がこの社会の利害の普遍性をもっているのだと言います。そして、いろんな場から排除されてきた歴史の中で、「誰も排除しない、排除させない」という運動の原則のようなことを築き上げてきました。そのことから、いろんな運動を結びつけていく潜在的力をもっているのです。

今の安倍政治をとらえ返すと、もっとも必要な、人間社会の原則のようなことを踏み外す政治になっているのです。今、自分さえよければいいというところでの金儲け主義で動いている政治の弊害が現れてきているのです。

それに反対することは、政治を否定する政治として、「ひとりひとりのかけがえのないいのちと生活」ということで動いて行くことではないでしょうか？

さて、表題に「「障害者」が政治行動の先頭に」という書き方をしてしまいましたが、わたしの「障害者」の立場から、障害問題を軸にして運動をしてきた立場から発した言で、

そこはさまざまな被差別者の立場、マイノリティ、シングルマザー、ワーキングプアー、ホームレス、などなどの言葉で置き換えても成立します。それなりに普遍性を持つ被差別の立場ならば、ということです。というより、被差別の問題で普遍性をもたないことはありえないのではないかとも思っています。

共に行動する情報・コミュニケーション・アクセス保障を考えるために

さて、わたしは「言語障害者」の立場で、コミュニケーション障害の共通性ということで、「聴覚障害者」と一緒に行動していく機会がでてくるからと、手話を学びました。ろう者の中には「ろう者は政治が嫌いだ」ということを「ろう文化」ということで突き出しているひとがいます。そもそも「障害者文化」ということで言えば、「政治とは、互いに意思を押しつけ合う世界」として、それを嫌うのは当たり前なのですが、政治が嫌いといっても、現実に押しつけられるということをはねのけなければならないのです。そのはねのける、そして押しつけ合うこと自体を否定する活動も運動であり、政治であらざるをえません。だから、「政治を否定する政治」という内容ももって政治に関わらざるをえません。ところが、分離教育や様々な排除や抑圧の中で、情報障害・コミュニケーション障害・アクセス障害を被り、非政治的な存在にさせられている状況があります。ですから、冒頭に書いたような状況に陥らされているのです。

そのことを押さえたところで、その障害をどう乗り越えていくのか、実際に保障をどうしていくのかを考えなくてはなりません。

それは「誰も排除しない排除させない」という運動の基本理念をひろげていくことでもあります。

そして、車いすマークが障害者の象徴となっているように、手話が「誰も排除しない、させない」という「障害者運動」の象徴になっていると感じているのです。で、わたし自身のできることはと考えたとき、自分の関わっている活動に手話をつけるということから始めています。この輪を少しずつ広げて行きたいと思っています。

(み)

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 57号」アップ(16/4/20)

◆ホームページもブログも少し読みやすくするために整理しようと思っています。宿題の作業が落ち着いてから、読書メモに出している本を参考文献として、アップしていく作業もやっていかなくは、そして、読書メモも著者との対話として、それを届ける作業もしていかなくはとも思っています。

読書メモ

『福祉労働』の積ん読を少し読み、脱原発—戦争法（シールズ）関係の文を情報を押さえて置きたいと少し読み、宿題が一応一段落して、反差別というところで必読書になるのではと以前から気になっていた『周縁のマルクス』を読みました。これは、きちんとノートを取り直すことですが、とりあえずのメモです。

たわしの読書メモ・・ブログ 326

・『季刊福祉労働 139 特集:障害者総合支援法スタート』現代書館 2013

もう少し、『福祉労働』で読み落としている号を遡っての学習をします。

「総合支援法」は、「障がい者制度改革推進会議」の骨格提言を（これ自体もわたしからとらえると妥協の産物的だったのですが）、ほとんど無視して、官僚側から提出された案で成立しました。そこで、何が抜け落ちているのか、ということがこの特集になっています。まずは、総合支援法への提言のために作られた「総合福祉部会」副部長だった茨木尚子さんの、官僚とのせめぎ合いの裏話的なことも含めた指摘があります。その後各分野での論攷があります。逐一紹介したいのですが、書ききれないので、是非この雑誌を読んでください。特集の最後は、「難病」に関する、当事者の大野更紗さんと行政サイドから政策に関わられた春名さんの対談です。「障害—難病—病気」というところで、「障害の社会モデル」や関係モデルではつながっていくところが、医学モデルから抜け出せない中で、谷間を作りだしていく構図がとらえられます。もっと言えば、シングルマザーとか、貧困とか、ワーキングプアとか、犯罪に追い込まれていくひととか、生きる事に困難を抱えさせられていることを障害として、関係モデルではトータルにとらえられることなのです。

この特集を読みながら、民主党時代の「障がい者制度改革推進会議」はそもそも何だったのかと考え込んでいました。民主党は、官僚政治を打ち壊し、政治家主導の政治を謳って登場し、そのことがこの「当事者が過半数を超える」画期的な「障がい者制度改革推進会議」にも現れていたのですが、結局、「骨格提言」も、官僚主導にとって替われ、ほとんど活かされず、自公政権に戻ってからは、従来通りの官僚主導の審議会設置と、官僚からの案提示に舞戻っています。民衆サイドからの要望に合わせて、政権公約を作ったものの、根本的に政権交代可能な二代保守による政治ということではどうにもならなかったのです。福祉の根本的な理念から煮詰めた、社会改革を求める政権交代にならなければどうにもならないということなのだ、この特集を読みながらわたしは改めて考えていました。

丁度、この雑誌を読んでいるときに、保育園を落とされた親が、「保育園落ちた、日本死ね」「何が一億総活躍だ」というショッキングなメールがインターネットで拡散されていました。テレビのニュース番組での国会中継で、安倍首相は野党の質問に答えて「子育ては家族の問題でもあるから、国家が全面的に介入できない」とかいつものごまかしの答弁をしていました。政府批判をするマスコミを電波停止すると脅すことや、愛国主義教育など進める国家主義の政治を進めるものが、「国家の介入はできない」など口が裂けても言えないはずです。そもそも「国家が介入」とかいう発想なのですが、共に助け合う関係性として、子育て支援をどうしていくのかの問題なのです。どのような「社会」を作っていくの

かのビジョンの問題なのです。相も変わらず、マスコミはちゃんと報道しないので、その議論の決着がどうなったかは分からないのですが、どうも、もっと根本的な迫及のできる政治勢力が必要なのだと、また改めての思いに至っている次第です。

さて、いつも、特集を中心にしたメモになっているので、少し他の処でのコメントを残します。「インターチェンジ・交差点」はエッセー的文がいつも載っているので、日々の活動・生活の中でのいろいろな問題が心打つ文になっています。今回、他の三つの文も感じ入ったのですが、吉野由美子さんの「勝手な時だけ見えないふりをする人と誤解されて」という文、わたし自身の「吃音者」の立場から、マージナルパーソンの問題に引きつけて読んでいました。連載の長瀬修さんの中国「障害者」情報、中西由起子さんのミスコン批判の文、この二人の連載楽しみです。

「季節風」は、いつも各分野での動きの情報源になっているのですが、今回山本勝美さんの「発達障害」を巡る公開シンポジウムの報告は、今「吃音＝発達障害」の議論で関心があって、特に刺激的だったのですが、そもそも「発達障害はなぜ異化してきたのか、異化しているのか」というとらえ返しに共鳴していました。

冒頭のウズベキスタンの二人の「障害者」が来日しての「自立生活」日本研修の話、「現場からのレポート」の二人を招いたひとの文とリンクしていて、世界的なつながりに疎いわたしにはとても刺激的でした。そういうところの情報収集と活動の輪を拡げていくこともやっていかななくてはいけないのですが、これもいろいろ疎いことの一つで終わってしまいそうです。

「現場からのレポート」、「心道学園監禁事件」の記事がありました。未だに信じられないような施設があり、行政や警察がそれを見過ごすという構図に、何か根本が間違っているのではないかという思いを持ちました。その他「現場からのレポート」、いろいろな課題でのレポートです。

福本英子さんの「ヒト iPS 細胞は何をしたのか」連載があります。この号は(二)です。(一)を読んだときに、続けて読もうとしたのですが、次号に載らなかったのもので、この連載を失念していました。(四)まであるので、まとめてコメントします。

たわしの読書メモ・・ブログ 327

・公開インタビュー「人工呼吸器をつけた子の親の会<パクパクの会>の成り立ちと現在」
『季刊福祉労働 133』『季刊福祉労働 134』現代書館 2011-2012)

『季刊福祉労働』を遡って読んでいるのですが、『季刊福祉労働 133』の特集を読み始めようとしているときに、「脳死臓器移植を問い直す市民ネットワーク」で、パクパクのひとの講演があるとの連絡があり、丁度上記の公開インタビューの記事(前半)が巻頭にあつたので、次の号の後半も合わせて読みました。

以前は人工呼吸器を着けて退院するという事はなかったそうですが、まさにそれを切り開いてきた親のひとたちの語りです。後半は、当事者のひとたちの活動と生活も出てきます。

子どもが生まれる前は、そんなことをできるとは思ってもいなかったし、むしろ「障害」

ということに否定的な思いをもっていたひとがほとんどのようですが、子のためにと
いうところから、子どものかけがえのない命というところから、自らの世界観の転換も為し
ながら、子どもに教えられ仲間作りが進んでいく、そして幾多の試練を乗り越えながら、現
在に至っている、子どももむしろ、できない子ではなくて、むしろ貴重な提起ができる子
になっていくし、何よりも、存在自体が貴重な提起をしている存在だという話として進ん
でいきます。

「脳死臓器移植を問い直す市民ネットワーク」講演についても書き置きます。

講演はパクパクの会の二人、巽奈歩さん「たったひとつの大切な命」永瀬哲也さん「命
の境界線—そんなものはあるのか」です。

巽さんは、ショックと泣いてばかりの三年から、「何もできなくていいよ、一緒にいよう」
というところに転換し、さらに、今は普通学級に通っていて、その中で、子ども達がいろ
んなことを吸収していく、貴重な存在となっているという話をされていました。「できない」
ということが、まさに反転しているのです。障害の英語は **disability** で、「できない」とい
うところから来ている語なのですが、それはそもそも身辺自立—「ひとりでやらなくては
いけない」というところから来ているのですが、そもそもひとは「独りで生きている」な
どということはないし、助け合って生きているのです。そして、まさに子どもの裕くんの
存在自体が、周りの人にいろんなことを教えてくれるかけがえのない存在なのです。わた
しはその話を聞きながら、山田洋次監督の、夜間中学を舞台にした映画を思い出していま
した。先生が生徒に「学校は何を学ぶところ？」と訊くと、生徒のひとりが「幸せって何
かを学ぶところ」と答え、先生が「(生徒に) 教えられた」と共感しあうシーンです。まさ
に、生きるってなにということ、裕くんがその存在で、訴えてくれているのだと。

永瀬さんの講演のテーマは、立岩さんの『人間の条件 そんなものない』という本のタ
イトルからきているそうです。命の境界線がだんだん、ひとの命を軽んじる方向で線引き
が押し上げられていくことを、パワーポイントを使って話されていました。

二人とも、提起されていた時間にぴたっと納めて話をされていて、試練の中で話す技術
も身につけられていく、まさに日々の生活の中での格闘が、ひとを変え、鍛え上げていく
たくましさを感じていました。

会場にパクパクの会のひとが参加されていて、何人か発言されていました。子どもが亡
くなられたばかりのひとが、家族の支援が全くない中で、看取ったという話は、ほんとう
に切実さを感じました。看護師さんが見えていて、自らの体験や、今の医療の現状を話し
ていました。尊厳死の話が出ていて、自己決定ということに、篠原さんの「ひとは生きた
いのだ」という叫びのような提言が心に残りました。篠原さんは、わたしが障害関係の本
を読み始めたときに、何冊か読ませてもらって共鳴していました。前々回の山口さんの講
演のときに、地域診療に努力されてきた早川一光さんが「患者になって初めて分かった」
という話をされているという話を講演に参加されていた娘さんがされていました。篠原さ
んも、心筋梗塞になられたそうで、むしろそういう経験が話にすごみを増幅させていくの
だということを感じていたりしていました。まさに、そういうことが病や障害、そして被
差別体験などにも共通していくのだとも思ったりしています。

たわしの読書メモ・・ブログ 328

・福本英子「ヒト iPS 細胞は何をしたのか」(『季刊福祉労働 135』『季刊福祉労働 139』『季刊福祉労働 141』『季刊福祉労働 142』現代書館 2012-2014

『福祉労働』の 135 で連載が始まり続きを読もうと思っていたのですが、続きがなかなか掲載されない中で、『福祉労働』を積ん読状態にしていた中で、読みとじていました。

連載の最初の頃は、まだ安倍政権が成立する以前だったのですが、2回目には安倍政権になっていて、安倍政権が何をしようとしているのかの分析に焦点も当てた論攷になっています。

iPS 細胞研究がどういうところから出てきて、どう位置づけられているのかの論攷です。

イノベーション(「技術革新」と訳せるでしょうか)が、規制緩和の中で、特にアベノ政治の経済成長戦略の中で、大きな課題として注目されているということです。そもそも、規制ということ自体が、環境破壊や利益追求ということの弊害を防ぐためにあったのに、特にアベノミクスの経済成長戦略の中で、あらゆることに規制緩和という事が進む中で起きていることです。それはまさに、グローバルゼーションということで、格差拡大、経済第一主義という矛盾の拡大であり、iPS 細胞の研究も、「ひとのモノ化」として進んでいるのです。そして、この研究は医療の高度化・高額化の中で、金持ちのための医療と、貧しい者の人体実験化としても現れてくることです。そして、規制が「どのような事が起きるのかをきちんと検証してから、ひとに使う」ということであつたことが、「緩和」という名の下に、取り除かれていくという意味ももっているのです。

アベノ政治はまさに金持ちのための、大企業のための政治をしていることが、如実になってきています。改めて、きちんとアベノ政治に対峙していく必要を感じさせもする論攷です。

たわしの読書メモ・・ブログ 329

・討議・小熊英二×ミサオ・レッドウルフ×奥田愛基「<官邸前>から<国会前>へ」(『現代思想 2016年3月号 特集=3・11以後の社会運動』青土社 2016 所収)

小熊さんは『1968』という本で有名な歴史社会学者です。その本は、まさにわたしの世代の運動を取り上げた本で一度読んで置かなくてはと思っていたのですが、この本にはフェミニストサイドから、取材もちゃんとしないでずれた文を書いているという批判が寄せられていました。そして、国会前の反原発・脱原発の集会で、どうしようもなくずれた発言をしていて、「帰れ」コールを受けていたのを聞いて、読む気をなくしていました。それでも一度は読んでコメントを残す本だとは思っているのですが。

この討議の中でも、すれた分析をしているのです。70年前後の運動が過激化したのは、少数派であったからで、2011-15の運動が多数派の余裕があり非暴力の運動ができたという話です。わたしはむしろ逆だと思うのです。今の学生は、政治的なことを話すとKYと言われる少数派の時代を生きているのです。わたしの故郷は長崎県の佐世保市です。1968年空母エンタープライズ寄港阻止闘争で、三派全学連が実力闘争をくみました。わたしの

父は反共のカトリック教徒で選挙では自民党に投票しているひとでしたが、そのひとが高台の家から望遠鏡を持ちだして、橋をめぐる攻防戦を見ていました。そして、別の日にその橋のところにまで出かけていました。橋のそばに市民病院があって、機動隊が打った催涙弾の煙が入り込んで市民が抗議していたという話を憤慨しながら話していたりしました。市民総体的にわくわく感があったのです。駅で全学連がカンパ集めをしたら、一万円札がぼんぼん入ったという話もありました。そのお金で、前の日に木材屋から勝手に持ちだした実力闘争のために使った角材のお金を払いに行った、そのことを称賛するような話が出ていたのです。断っておきますが、これはわたしの高校三年のときで、ノンポリでどちらかという反共であったわたしの感想です。潮目が変わったのは東大安田講堂の敗北とその中でのマスコミが政府の過激派キャンペーンに乗っていったところで、まさに少数派に転落していったのです。小熊さんはまさに時代精神を押さえ損なっています。

現在の沖縄基地闘争は実力闘争を組んでいます。それは基地反対 80%とオール沖縄という沖縄の世論を背景にしているのです。シールズは実力闘争を組む意思はないのではと押さえていました。台湾や香港の占拠闘争が敗北に終わったことの総括から来ているのではと、想起していました。奥田さんがこの討議で実際にそのような話をしています。で、「本気で止める」という話やコールをしていたのですが、どういうイメージをもっていたのでしょうか？ 8.30には、12万のひとが国会周辺に集まりました。それが20万30万となったら、止め得るといふ思いがあったのでしょうか？ 国会突入という話をしているひといますが、わたしはむしろ国会包囲で与党の議員を国会に入れないというところまで自然発生的に進んでいくというイメージがあったのかとったりしていました。わたしは横浜の地方公聴会でのねっころがり実力闘争にそのヒントと端緒があったのではないかと思います。結局、シールズも8.30に警察の車道に入らせないという規制を決壊させ（どうも、シールズは決壊に乗っただけのようなのですが、とにかく実力行使的なこともしたようです）、国会正門前に進みました。実力闘争はしないというところを踏みえたところでどういふ議論があったのでしょうか？

さて、もうひとつ大切な問題があります。それはミサオさんが、官邸前や国会前で抗議活動ができるようになったその空間を維持していかなくてはいけないと言っていることに通じることです。それは、シールズの集会の規模が大きくなるにつれて、警察がシールズへ通じる道を意味不明の規制をして、集会参加の人数を少なくする、少なく見せるということをはじめたことがあり、それに対する対応の問題です。これに対して、70年安保世代と思われるひとたちが抗議していました。その横で、シールズの誘導係のひとが衝突回避の誘導をしていたのです。わたしは戦争法案反対よりも、ファシズムの突撃を阻止することが優先することだと思えます。集会を開く自由を維持していくことなしに、戦争反対の運動も組めないからです。後で、見守り弁護団と抗議行動をしています。そもそも「ファシスト通すな」とかコールしながら、ファシズム的な動きに対応できていなかったのではないのでしょうか？ そもそも何か、いろいろ言ってくるひとたちに反発さえ感じているようなのですが、対話できないアベ政治の批判をしながら、自分たちもきちんと対話しえない状況もあったのではと感じているのは、また余計な「発言」としてしかとらえられないのでしょうか？

それは「国民なめんな」というコールにも表れています。奥田さんは後に「国民なめんな」コールをしながら、「民衆なめんな」という言い換えもしていたので、アベノ政治の根幹は「国家—国民」の論理として突き進むファシズム的な国家主義の動きを押さえていると思っていたのですが、この討議の内容を読んでいると、どうもわたしの深読みだったようです。ちなみに、「国民なめんな」コールと共に「言うこときかせる番だ、俺たちが」（このコールは性差別的なことがあり、女性のコーラーから「わたしたち」という置き換えも起きていました）コールを聞きながら、実力闘争と警察との対峙を回避していることに実態があっていないと感じつつ、警察がきっと「警察なめんな」「国家なめんな」という思いを募らせるのではないかと、思っていました。実際に、警察の不当規制に抗議する鉄柵をめぐるせめぎ合いが起きていたのですが、その中で9.17だったと思うのですが、ぼこぼこにして、担ぎあげて逮捕する事態が生じていました。たぶん、警察の「警察なめんな」の意思表示だととらえていました。シールズはこの事態をどうとらえていたのでしょうか？

わたしは警察との攻防については、70年安保世代が本気で「本気で止める」ということで実力闘争に踏み込んでいった中で、現実には目の前の警察の阻止線を突破するということでの攻防戦に入ったのですが、そういう警察が目の前の敵として表れてきたから、敵としてぶつかっていく思考のとらえ返しも必要になっているのだと思います。ただ、「本気で止める」ということを一体何をどうしようとしていたのかも分からないままです。そして、直接行動としてあったことを、保守の二大政党交替の制度としてガチガチに絡め取られた間接民主主義の「議会制民主主義」的なところに運動を集約させることで、一体何を変え得るのかという思いをわたしは持っています。

もっとも、奥田さんは、この討議の中で「現状をとにかく維持して、これ以上悪くしないで欲しいと思っている。革命を起こして社会をひっくり返そうとは考えていない（笑い）」と発言しているのですが、そもそも時代状況のとらえ返しが分からないのです。戦争とファシズムの突撃の時代には、保守は凋落していくのです。立ち止まるということは許されない時代なのです。運動を幅広いものにしていくところを意識して、革命ということは持ち出さないという意識が働いているのかも知れません。

ですが、時代状況的に今こそ「世界は変え得る」という突き出しが必要になっているのではとわたしは思えるのです。アメリカの大統領予備選挙でも、「変える」というところでの両極の台頭の動きがでていっているのです。そういうドラスティックな運動が今必要になっているのではないのでしょうか？ 確かにまだ期は熟していない、というとらえ方もできます。ならば多分、この運動は敗北に終わります。もうひとつ書いて置けば、トロッキーが『ロシア革命史』の中で、「民衆が先進的だから革命を起こすのではない、むしろ保守的だから、その保守的なところが維持できないところで革命が起こるのだ」という趣旨のことを書いています。勿論、そんな状況ではないという話になるのかもしれませんが、だが、そもそも奥田さんは何を見据えて動いているのか見えてきません。とりあえず、戦争法廃止ということでしょうか？ でも、それはむしろドラスティックな変革がもたらされない限り、敗北に終わります。問題は敗北の中で何を勝ちとっていくのかというとらえ返しになります。そんなことが何も出ていないのではないのでしょうか？

もうひとつは、ミサオさんのことです。ミサオさんと彼女が属する反原連がどこまで同

一化できるのか分かりません。反原連は市民運動の原則のようなことを踏み外しているとしかわたしにはとらえられないのですが、これについては機会をみて提起していくことを考えているので、別の機会にちゃんと文にしていこうと思っています。

この対談でも、過去の運動ということのとらえ返しから、自分たちの行動の方針を出して行くということが語られています。どうも、ところがこの対談は過去の運動の総括がきちんとなされているとは言えないのです。そして、安倍政治の根幹が国家主義にあり、そこでのファシズムの突撃という内容をもっていることを押さえていないようなのです。

そもそも小熊さんが過去の運動を押さえ損なっています。この対談は、小熊さんとの共鳴というところで設定されているようなのですが、もう少しきちんとした軸での討議が必要ではないかと思うのです。

たわしの読書メモ・・ブログ 330

・小林哲夫『反安保法制・反原発運動で出現——シニア左翼とは何か（朝日新書）』朝日新聞出版 2016

SNSでとりあげていたので買ったのですがワイドショー的週刊誌の記事です。いつもはだいたい順に読んでいくのですが、拾い読みして行って、一応最後まで読んだという次第です。取材はちゃんとしているのですが、分析をほとんどなしえていないし、その分析も正確かどうか疑問です。まあ、一応情報として得ることはそれなりにあったのですが。

シールズが 8.30 の国会前信号の決壊を引き起こしたと思っていたのですが、この本ではこれも国会正門前南庭の決壊と同じように（こちらは自然発生的だったのではと思います）、シニア世代のグループがこちらは意図的やったという発言を取り上げています。

ということは、あの違法な、と言い得る警察のファシヨ的警備をシールズがどうとらえていたのか？ という疑問を改めて持たざるを得ません。「ファシスト通すな」とか「国民なめんな」とか「いうこと聞かせる番だ、俺たちが」とかコールしながら、それに対応する行動がついていず、それに関しては結局コールだけということになってしまいます。わたしは戦争とファシズムは同時に手を携えてやってくるものだと思いますが、どちらかというとファシズムが先行するし、戦争阻止ということは繰り返しその場でのとりくみができますが、ファシズムはそのときに止めないともう後がないことなのだと思います。そもそもシールズの運動があれだけでもあがったのは、反原連主催の脱原発の運動での首相官邸国会前のあの場があり、それが特定秘密保護法—有事立法反対の運動として引き継がれていたからで、あの場を使う者はその場がつぶされることを阻止する責任があると思うのです。ファシズム的な警察の警備を過小評価してとらえていたと思わざるを得ません。

ですが、そもそもシールズは前の世代が主体的に動けない中で、「何も意思表示しないことは、賛成していることと同じ」という一致で動いていたグループです。運動を崩壊的にしてしまったわたしたち（わたしはいわゆる「団塊の世代」です）を含む世代の自己批判的な総括が必要なのだと思います。

もうひとつ、シールズが実力闘争を組まなかったことへのシニア世代のいろんな思いがあります。8.30 決壊がシニア世代がやったことで、シールズの国会前への移動が実力闘争

でなかったのか、それでも呼応した実力闘争ととらえるのかの問題があります。そもそも警察の規制のままに従っていたら、12万という航空写真の図はなかったわけで、9月に8.30を受けて国会の内と外との連携のようなことが生まれていたことをとらえれば、あの決壊をどうとらえていたのかも問題があります。主催者シールズや総がかりの非実力闘争という意図を汲みつつも、阻止線を突破するシニア世代の決壊を暗黙の了解のようなことで、歓迎して呼応関係が生まれていたのでしょうか？ 9月にも鉄柵を巡る攻防が意図的にあるいは自然発生的に起きていたのですが、そのことをシールズは呼応的にとらえていたのでしょうか？ 横浜での公聴会で「寝っ転がり」がありました。あれはまさに実力闘争でした。沖縄では、辺野古新基地反対で非暴力の実力闘争を組んでいます。沖縄では抑圧と切り捨てる歴史の中で8割のひとが基地に反対しているという背景があるところでの実力闘争をくんでいるのですが、そもそもたくさんをを集めるということをやって、集まったらそこで自然発生的なところに依拠して何か起きるといようなことを考えていたのでしょうか？

この本で疑問に思ったところがいくつかあります。この著者は共産党への高齢者の入党をとらえ損なっているのではないかと思います。共産党はいろんなところで繋がりを作っています。そのひとつが医療関係です。高齢者の入党は共産党系の病院を利用するひとが少しでも手厚い介護・看護を受けたいとして入党していることもあるのではと、母が同じく共産党系の病院にかかっていた経験からとらえ返しています。イデオロギー的に共鳴して入党したのではないのではわたしは推測しているのですが、どうなのでしょう？

もうひとつ、「内ゲバ」（そもそも何が「内ゲバ」なのかということもあるのですが）を左翼運動の宿痾のようにとらえている話も出ているのですが、わたしは暴力の安易な行使の中で、それがさまざまな要因の中で、増幅して至ったことだと押さえています。そもそも70年安保世代が暴力的であることは、そもそも差別ということが暴力であり、差別を容認することが容認することが暴力を容認することになる、というところで反差別というところでの根源的反暴力主義としての暴力の行使も厭わないとなったのですが、そのことがどこまでの根源的反暴力主義の範囲なのかということがきちんと押さえられなかったのだと思います。一方で非暴力主義の象徴的なこととして、ガンジーの非暴力主義は、カースト制度という差別—暴力に反対するひとたちにハンストということをもって反植民地運動への統一を図り、そのことがカースト制度を存続させることになったというところで、ガンジーの非暴力主義が反差別になっていない、差別を容認することは非暴力主義になりえない、という批判があります。

まあ、週刊誌的なところとはいえ、そういう意味で鵜呑みにはできないのですが、いろんな情報や人間模様をそれなりに知り得たというところではそれなりに興味をもって読んでしまったのですが、おそらく「面白く」読み飛ばす本になってしまっています。そもそも、ことはひとが命や一生をかけてやっていることで、「面白く」読み流すようなことではないので、そのような形で記事にして終わっているということにわたしは抵抗感を感じていたのですが。

・ケヴィン・B・アンダーソン／平子 友長・明石 英人・佐々木 隆治・斎藤 幸平・隅田 聡一郎訳『周縁のマルクス—ナショナリズム、エスニシティおよび非西洋社会について』社会評論社 2015

この本は、わたしがこれまで読んだ本の中でも、何か結節点になる、とても有意義な刺激的な本でした。

マルクスはサイドから西洋中心主義という批判を受けています。インドに関する「文明化」という件での論攷などが特に批判の対象になっています。マルクスの中でも変遷があり、ポーランド問題、アイルランド問題、アメリカの南北戦争という時事問題でのコメントや後期マルクスの民俗学に関するノートなどで、『共産党宣言』での単線的段階論から複線的展開論に転じているということが、この本のテーマになっています。このあたり、『資本論』のフランス語訳の中でマルクスが展開していることなのですが、エンゲルスがこのあたりを理解し得ず切り捨ててしまっているところで、長くマルクスも含んだ差別性というような語りが出てきているということもあるのです。

さて、わたしも『資本論』と並行した民俗学に関する晩年のノート」というような書き方をしていたのですが、そもそもマルクスは実践家でもあったわけで、そこでの現実的運動での差別に関する論考の中で、自らの差別性をとらえ返し乗り越えていったということがあり（勿論もう少し読み込んで、ひきずっている限界も指摘していく必要もあるのだと思います）、そして、そういう中で、民俗学的そして「自然との代謝」的な論考を積み重ねていったということもあります。

この著者は、新『マルクス・エンゲルス全集』の編集にも関わる中で、マルクスとエンゲルスの距離問題や、マルクス変遷を押さえる作業をしています。

わたしとしては、フランス語翻訳の中で、マルクスによって独自に立てられた「本源的蓄積論」、そのことはローザ・ルクセンブルグの「本源的蓄積論」にもリンクしていくのですが、そのことが反差別ということが、階級闘争といかにリンクしていくか、そもそも共産主義ということの基底に反差別ということを置くという反差別共産主義論を展開しようというわたしにとって、この本はとても刺激的な本だったのです。

ですが、課題を多く抱えつつ、どこまでマルクスの文献学的突き詰めをなしていけるかということで、落ち込んでしまわざるをえないのですが、廣松さんの理論的なことと晩年のマルクス研究をリンクさせるようなこともやってみたいという思いもふつふつと湧いています。まずは、「反差別共産主義論」を展開した後に、余力があれば、そちらにも力をとったりしています。余りにもおこがましいのですが、晩年のマルクスの学習に自らを重ね合わせたりしているのですが。

この本は大切な本で、学習会とか、この本から派生して学習を展開していく、ノート作りをして改めて読み直したい本で、こんな簡単なメモではすまないのですが、とりあえずのメモを残します。とても貴重な資料です。特に反差別とマルクス、共産主義をつなげる貴重な資料ですので、是非読んで下さい。

映像鑑賞メモ

ポレポレ東中野で前売り券を買っていた映画を観に行きました。映画も良かったのですが、アフタートークに共鳴して書いた文です。

たわしの映像鑑賞メモ 012

・原村政樹「無音の叫び声」2015

農民詩人の木村迪夫さんを描いたドキュメンタリー映画です。父と叔父を戦争でなくし、父の遺言「迪夫は百姓になれ」で百姓になり、農民青年団・青年学級に取り組み、叔父の亡くなった地の遺骨収集活動をし、出稼ぎやゴミ屋などをしながら、マキノ村で農業を続ける木村さんが地域の画家や詩人仲間、そして遺骨収集でしりあつたひとたち、「三里塚」の映画監督の小川さん、などなどひとたちふれあいを描いたとても素敵なドキュメンタリー映画です。

映画のアフタートークで女優で演出家でもある渡辺エリさんと原村監督の対談がありました。渡辺さんはこの映画の舞台のとなりの村で育ったとのこと、トークは食糧自給率が30%台と農業を切り捨ててきた、そして農業政策に振り回される農業、原発再稼働批判も飛び出し、監督が「過激な発言をすると言われていたのに、してしまった」という発言に、渡辺さんが「何が過激なの、当たり前のことを言っているだけ」と突っ込みをいれるとても刺激的なトークでした。東北には宮沢賢治を含め多くの哲学をもつ詩人や画家がいて、そして演劇人にも哲学的なことを思いながら生きているひとがという話も出ていました。なぜ、「この国は農業を、ひとが食べるというもっとも大切な基本的なことを切り捨てていくのか」という問いかけを、拡げて行かなくてはと改めて思い考えましたー

情況への提言詞(6)

山河破れて「国」なし

国破れて山河あり

国などなくなっても民衆は新しい生活を始められる

山河破れて「国」はない 「日本」死ぬ

この国の政治家は、金の亡者の企業のために奉仕する政治家

すぐ側の火山が次々に噴火し、大地震が起きているのに

地震や火山の予知は難しいということが

ますます明らかになっているのに

まだ原発を動かし続けている

想像力のかけらもない

危機管理のイロハもしらない政治家たち

この機に乗じて、憲法の緊急事態条項の話をしている
歴史を知らない政治家達

関東大震災の時に何が起きたのか
権力や権力側のニンゲンが虐殺事件を起こしたのに
必要なのは緊急事態法制度ではなくて
緊急事態を宣言して無法な殺人を起こすことを取り締まる法律
緊急事態宣言制止法ではないか

特定秘密保護法や有事立法を作ってきた政治家たち
必要なのは情報公開で
秘密隠蔽・操作罰則法のはずだった
それがスピーディー情報の非公開で被曝したフクシマの教訓
風評被害は情報隠蔽や歪曲をし続ける政治家が作りだしている
そのことがなぜ分からないのか

真逆なことをやり続ける政治家達

「美しい日本」を謳った政治家よ
放射能除染の黒いフレコンパックが積み上げられている風景を
「美しい」と言えるのか

武器を輸出する死の商人の政治営業本部長を務める首相
事故の原因も究明しない事故収束しない原発の輸出を進める
金の亡者の企業に協力し、推進主体になっている首相
一体何が「美しい」のか

空母に乗って戦闘機にのって得意げに写真を撮らせている
戦争の道具はおもちゃや架空のゲームではない

ひとりひとりのかけがえのない命や生活や被害者の思いを
これっぽっちも理解しようとししない首相や政治家達
「日本」死ぬぞー

(編集後記)

◆この編集に入ったところに熊本で地震が起きました。火山の噴火が続き、地震もあちこちで起きている中で、あまり地震の予想がマスコミで語られていなかった九州での大規模な地震です。気象庁は「どうなるか予測がつかない」と言い、震源地が北東と南西に移動する可能性があると言われてもいます。北東には再稼働申請されている愛媛の伊方原発があり、南西には稼働中の鹿児島島の川内原発があります。信じられないことに、川内原発を止めようとしません。そもそも、これだけ火山噴火と地震の多発する日本で原発が存在すること自体がおかしいのです。外国のメディアもそのことを指摘しているのですが、日本のマスメディアはちゃんと伝えようとしません。一体フクシマの教訓はどうなっているのでしょうか？ おまけに、オスプレイを既成事実化しようと、救援物資を運ぶのに意味のない使い方をし、「緊急事態条項の検討」などという、政権自らが「火事場泥棒」的な動きをし、こういうときに恒例となる首相の被災地の訪問もしません。農業や医療を破壊するTPPの審理を優先させています。まさに「ひとりひとりのかけがえのない命と生活を大切する」「被災者の思いに応える」政治を欠落させるどうしようもない政治家達が政権を担っているのです。引きずり下ろさないと、もう「日本死ぬ」です。

◆巻頭言の文、「共に行動する情報・コミュニケーション・アクセス保障を考える会」（仮称・準）を考えて動き出そうとしています。なかなか意見を同じくするひとには出会えませんが、まして、情報・コミュニケーション・アクセス障害の問題があります。自らが動く中で、関係を作っていくということで、実際に動き出す中でしか何も生まれないということで、いろいろな問題を考えつつも動き出します。「この指止まれ」に手を、もしくは「この指止まれ」の手を出してください。

◆「読書メモ」は、継続の『福祉労働』の遡及と、去年7月—9月の戦争法案反対の運動に関する文書を読みました。反原連も含めて新しいタイプの運動で、その運動があったからこそ、盛り上がっていて、新しいうねりが創り出されようとしています。運動を創るのに失敗してきた古い世代から、どうのこうのと意見を押しつけるようなことは避けようという思いがあるのですが、そもそも過去の運動の総括なしに運動の敗北をくり返すわけには行かないと思います。シールズのひとたちも過去の運動から学ぶという姿勢もあるようなので、その総括のようなことをやってきた立場から提起しておきたいと文にしました。どうも市民運動の原則のようなことも風化してきている現実をどうにかしたいという思いももって。

『周縁のマルクス』はマルクス派の立場から反差別論を展開しようとするわたしにとって貴重な文献です。どこまでやれるか難しいのですが、もう少し踏み込んだメモも考えています。

◆映像鑑賞メモは、まさに農本主義的などころに螺旋的に回帰していく将来の世界像に結びついていきます。

◆詞的などころで、「日本」などということばを使ってしまいました。アベノ政治の根幹は国家主義にあり、「日本」ということばを使いたくないのですが、敢えて反語的に使いました。

反障害－反差別研究会

■会の性格規定

今、‘障害’という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

■連絡先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

ホームページトップ

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/newpage1.html>

「反障害通信」一覧

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/httpwww.k3.dion.ne.jp~adsnews.html.html>